神戸山岳会　会報

創立五十周年記念号

目

次

―― 創立五十周年を迎えて ――

序　文……岸本光弘……二
記念会報の発刊にあたって……片山英一……四
神戸山岳会の会章について……川本　勉……一〇
剱岳によせて……新川利夫……一三
たった二人の山……川本　勉……一四
思い出の山……新川利夫……一六
但馬をめぐる山々……丸屋信雄……一八

―― 海外登山の記録と思い出 ――

台湾山岳　三尖五岳・登山の記録……岡田政一……三一
ヒマラヤトレッキング・アイランドピーク紀行……小林利樹……三一
アルプスそしてピレネーへの山旅……土居健次……三五
ケニヤ山とキリマンジャロ山……土居健次……七二
中南西アジア踏査登山隊の頃の思い出……立岡佐智央……七九
チョモラーリ・ベースキャンプへの旅……片山英一……九四
ブータントレッキング報告……新川利夫……九九

―― 亡き友たちへの追想 ――

思い出の仲間たち……片山英一……一〇九
想い出の記……島田文雄……一一一
大樫正之さんの想い出……野上芳宏……一一三
三宅信道氏を偲んで……宮松　暁……一一五
玉井保さんを悼む……丸屋信雄……一一六
堀野和子さんと過ごした青春の思い出……乾　美子……一一七
香地博方君の思い出……岸本光弘……一一九

―紀行・随想―

ＯＢの一人ごと……島田文雄…一三三
登山者の健康管理と身体機能……米澤典之…一二四
岩登りに思う……古賀英年…一二六
東北の山旅……幸内義孝…一二八
一九八七年剱岳春の合宿に参加して……佐久本嘉一…一三〇
神戸山岳会に入会して……青谷晋行…一三二
神戸山岳会に入会して……岩崎里美…一三三
神戸山岳会に入会して……竹内省吾…一三三
神戸山岳会に入会して……吉田典夫…一三四
神戸山岳会に入会して……月脚祐子…一三五
神戸山岳会に入会して……寺川喜美…一三五
入会当時の思い出……金田順子…一三七
私の山歴……森脇種夫…一三八
山に行きたい……都倉幸江…一四〇
我が山行への思い……星野辰也…一四〇
山について思うこと……松本智圭…一四一
私のマウンテンライフ……芝　正人…一四二
今までに一番印象に残った山行……永田　宏…一四三
六甲・摩耶・地蔵谷の道を行く……大橋清孝…一四五
一期一会……米澤典之…一四六
青いケシを求めて　＝インドヒマラヤ一人旅＝……平木賢一郎…一四八
あとがきにかえて……古賀英年…一五二
剱岳登山年表

創立五十周年を迎えて

序文

神戸山岳会会長　岸本光弘

わが神戸山岳会は、昭和十五年に嶺同人山の会等の会員を結集して、神戸山岳会と名称を改め発足してから、平成二年をもって創立五十周年を迎えることになりました。

昭和・平成と半世紀にわたり、幾多の山なみに足跡を残し登山歴を積み上げて今日を迎えました。現今にいたる登山人口の増加により、登山が新しいスポーツとして取り組まれ、国体にも登山部門として加わることができるようになりました。高度な登攀技術と体力が要求される競技であり、半世紀前の時代には考えられなかった現況であります。

また、登山装備も発達改良され、一般の人たちも容易に入手できるようになって四季を通じての自然に触れられる登山、あるいは登山技術の習得により、より高度な積雪期の山々にも足を踏みいれることができるようになってきました。現在の神戸山岳会には、創設

当時から山をこよなく愛し、今もなお自分に適合した山行を楽しみ、国内、海外と活躍されている先輩がいることは、心強くも羨ましいかぎりです。

ひるがえって、長年の登山の記録のなかで心に残るのは山での事故である。登山を続けるかぎり、登山者にとっては避けることのできないようにも思われるが、山での犠牲者を出さない登山における安全性の確保と、山に赴く前の健康維持と体力増強といった登山者自身の健康管理が、これからの課題であろうと思います。神戸山岳会創設以来、会の発展向上に多大の貢献があった前田浩氏が、剱岳において帰らぬ人となったのは、昭和五十七年九月の出来事でした。

前田浩氏はわが会の会長であり、兵庫県山岳連盟副会長であり、神戸登山研修所にあってのよき指導者であった。また、全日本山岳連盟から日本山岳協会にいたるまで幅広くその運営にたずさわられるなど、登山界の発展に尽力され親しまれた人であった。氏は私に、自分が登山を始めてから五十年になるので、剱岳に行くのだと嬉しそうに話されていたが、その山行途中で急逝されてしまった。いうところの登山につきもののアクシデントではなかっただけにその死が悼まれてならない。

こういった生命をかけ、幾つもの事故を乗り越えて築かれてきた神戸山岳会が、五十周年の節目を迎えるとき、今後の登山のあり方を考える時期に来ているように思えます。

この五十年の伝統と先輩たちの記録を足掛りに、さらに一歩一歩を積み重ねて新たな歴史の第一歩となるように、神戸山岳会の益々の発展と飛躍することを望みます。

記念会報の発刊にあたって

片山英一

神戸山岳会創立五十周年記念会報を発刊するのにあたって、昭和十五年（一九四〇年）十月に創立した当時のいきさつと、戦中、そして戦後の再出発の頃を思い出すままに綴ってみたいと思います。昭和十八年に私が応召して留守中に住居が空襲によって焼失してしまったので、当時の記録の一切が失くなってしまった。したがって遠い記憶を呼び起しながらの記述なので、いろいろと間違いや思い違いがあろうと思われるがお許しを頂きたい。

昭和十二年に勃発した「支那事変」は当初は局地での交戦で収める方針と言われていたが、予想に反して日と共に戦線は拡大し、日本の皇紀二六〇〇年を記念する昭和十五年頃はぬきさしならぬ泥沼に足を踏み込んでしまった様相を呈しておりました。軍需用にあらゆる物資の消耗は激しく、私共の日常生活は日を追って乏しく厳しいものになって来ました。統制はあらゆる分野に及び、主食の米、麦はもとより魚、肉、野菜、調味料に至るまで。又衣料などの繊維類の一切が割り当ての切符制となり、思ってもみなかった窮屈な暮らしに追い込まれていた。山へ入るにしても冬山の燃料としてのガソリン・アルコール類は言うに及ばず、米、野菜、副食類の入手は極めて困難となって来ていました。交通・輸送も軍事が優先し個人の旅行も制限され、私共が山へ登るため松本や富山へ行くにも前もって登山目的や日程などを届けないと国鉄の切符を自由に手に入れることは困難となって

来ていた。

神戸には沢山の社会人の登山団体があったが、現役兵や補充兵として若い仲間は次々と軍務に服し海外の戦線へと出征してゆき、或いは軍需工場へ徴用されるなど山へ登れる若い連中は目に見えて姿を消していった。このような国情の中では登山界も他のすべてのスポーツ界と同様に国が進めている統制に添ってゆかざるを得ない情勢となってきつつあった。小さなグループに分散していてはやがて自滅して消えてゆく他ないのではなかろうか。むしろ進んで当時の国策に順応した統制機構をもつ団体を作り、それへ統合して生きのびることを考えざるを得ないものと考慮されました。

そんな時に、私共が山登りの勉強の場として月に一回、各登山団体の輪番で世話をしていた「神戸山の集い」の席で、神戸在住の旧R・C・Cのメンバーの先輩達と話し合う機会が持たれた。藤木九三氏、津田周二氏、水野祥太郎氏等の各位と数回の懇談を重ね、神戸近郊の社会人登山団体を集め「神戸山岳会」を結成することに合意し、藤木、津田両氏を顧問とし水野氏を会長として紀元二六〇〇年を記念し発足することとなった。各団体を走り廻ったり、会則の案を作ったり、会合の日時・場所の準備をしたり、そんな使い走りと取りまとめは私が一人で引っかまえて奔走したものであった。当時すでに神戸には以前から「神戸山岳会」は存在していて、会長は元町の美田宝石店の美田為三氏が主催しておられたのを、いろいろ事情を説明しその会名をゆずって頂いたことを思い出す。

参加した団体は私の所属する「嶺同人」の他「榾火を囲む会」（島田眞之介氏主催）「B・K・V」（多田繁二氏主催）。それにはっきり覚えていないが、或いは「神戸ハイキングクラブ」「アイスアックスクラブ」などがあったのではなかろうか。事務所は三宮町一丁目近くの木造の建物の二階の小さな部屋を借りていたが、どんな伝手で借りていたのか思い出せない。私達は毎夜のように狭い事務所に集って山の話に時間を忘れた。嶺同人には青木一男、前田浩、島田文雄、私、馬場芳雄、新川利夫、川本勉等がいたし、榾火の会には廣瀬文雄、田中實等の顔が見えた。嶺同人の西田弘（旧姓小橋）、木村寅次郎、中村

作三、生田育雄、片山武臣等は出征して外地の戦線にあった。ＢＫＶの多田さん、小野さん、須々木さん、坂本さん等先輩各位のお顔も見受けられた。

神戸山岳会は半年余りの準備の期間を経てどうやら十月頃に結成、発足したのだけれど物資の不自由な折からなので、祝賀会のような行事は特に持たなかったように思う。結成記念として、十一月三日の明治節の佳日を期して「皇紀二六〇〇年奉祝・富士山登山」を行った。馬場、新川両君が参加したが、他に誰が同行したのか思い出せない。この富士登山の記事と写真が朝日新聞に報道された。

昭和十五年の年末から十六年の新年へかけて、初めての冬山合宿を計画し、八ガ岳連峰へ入った。赤岳の鉱泉を基地に三カ所にテントを張り、三隊に分かれた隊員が、阿弥陀・赤岳・横岳・硫黄岳・大童心・小童心などアタックし縦走しながら各テントを交替に泊り歩く計画だったと覚えている。大勢の参加があって賑やかであった。四月には遠見尾根から五龍岳、五月には涸沢から前穂高北尾根、奥又白池へ、そして八月には涸沢で岩登り合宿を行った。これらの記録はどこかに見当らないかと探している。

昭和十七年一月には遠見尾根を目指して神城村の下川又寛氏の宅に入ったが悪天候が続き深雪のため遠見の小屋迄も入れず数日滞在の後松本へ下った。松本で一泊のあと天候の回復に希望が持てたので乗鞍岳へと方向を変えた。その年の八月、涸沢へテントを張り、奥穂高、北穂高、奥又白などの岩で遊んだ。然しもうこのあたりが山へ入る最後になったような気がする。私等の周辺には若いクライマーは全く姿を消してしまっていた。応召、徴用の徹底で街は老人と子供ばかりになっていた。

昭和十八年一月、新川君も現役兵として入隊がきまっていて、私と二人きりで上高知へ入った。島々から奥へ入るバスに、私達のスキーを積んでもらえず、この時世に山へ来るような奴は非国民だと言われたが何んとか頼んで乗せて貰った次第であった。稲こきで降されてスキーを担いで歩いた。上高地も徳沢も誰もいなくて静かであったが淋しかった。天候も悪かったので涸沢へ入るのを諦め徳本峠を越えて島々へ下り、又引っかえして乗鞍

岳へ向った。鈴蘭小屋へ泊り福島清毅さんの歓迎を受け久しぶりに真白に光る米だけの食事にありつき、飲み込むように押しこんだ味を思い出す。位ガ原まで登ったが激しい吹雪にはばまれ下山した。このあと私にも召集令が届き神戸山岳会の活動は終った。神戸は数度の空襲により焦土と化し廃虚の中に敗戦の日を迎えた。

ここで神戸山岳会の結成及びそのあとの活躍の中心となって動いて来た旧「嶺同人」について少し記しておきたい。

登山団体「嶺同人」は昭和九年（一九三四年）二月十日に創立総会を開催し結成された。総会の出席者及び会員は、青木、前田房男、住田、久米、前田浩の五名と小橋（後に西田）、木村、崎村の八名であった。その年の五月に前田（房）、久米の二人と中西健二氏が剱岳へ登頂し長治郎谷を下っている。八月には青木、木村の両名と稜線山岳会の藤林さんの三名で、前穂高岳屏風岩第二ルンゼの登攀に成功した。

年末年始の冬山は木曽御岳と八ガ岳の二手に分れ青木、崎村は御岳へ、そして小橋、前田（房）、木村、久米の四名は八ガ岳へ入り一月六日、大童心直下から登攀を始め積雪期の横岳胸壁のバリエイションルート登頂に成功した。昭和十年（一九三五年）に片山が入会し五月に木村、久米、片山の三人で奥穂高小屋へ入り、ジャンダルム飛騨尾根のクライミングを楽しんだ。この時の若々しい独身のガイド奥原守君は現在西穂高山荘経営の村上守氏であり、上高地に山荘を建築中の帝国ホテルの木村殖氏のご一家とお目にかかった想い出は懐しい。八月、青木、木村が涸沢にテントを張り北穂高滝谷第三尾根・第四尾根へ。九月には片山が単身、大杉村から父ガ谷を登り地池谷へ下った。昭和十一年の一月、鹿島槍ガ岳の冷沢で冬山合宿を行った。前田（房）、木村、久米、崎村、片山が参加した。青木、住田の両名は乗鞍岳へ入った。三月に木村が木曽御岳へ登っているがこの時初めて島田が参加している。此の年馬場が入会した。馬場と私は良く鈴鹿の山や谷を歩いた。八月、片山は弟の武臣と二人で赤石岳から赤石沢を下降し大井川源流へ出ている。同じ八月、木村、前田（浩）、崎村三名は涸沢のテントからジャンダルムや北穂高滝谷の第四尾根を

登攀。十一月には新雪の木曽駒ケ岳へ小橋、前田（房）、木村、久米、馬場が参加。昭和十二年の冬山は全員で上高地へ入った。一月二日、雪が少く車が中の湯まで入ったのでその日は一気に徳沢まで入った。徳沢小屋には西山の隠居が越冬していた。翌日パーティを二つに分け、一隊は槍ガ岳へ、そして奥穂高へ向う隊は前田（房）、片山、馬場とガイド平林の四人で奥穂高岳登頂後一の俣山荘へ入った。槍へ向ったパーティは一日休養後登頂に成功した。青木、木村、久米、前田（浩）、前田（房）、馬場の六名で連日の好天に恵まれた。この春、崎村が東京へ転勤のため退会し、新たに松村、島田、片山武臣が入会した。

「嶺同人」は兵庫県立第一神戸商業学校の山岳部を昭和六年（一九三一年）以降に卒業したＯＢばかりで結成し運営して来たのであったが、山行は次第に回を重ね技術も向上し対象として選ぶ山も困難の度を増してくるようになりつつあった。又入会を希望する同好の士も増えて来たので、県商山岳部ＯＢの会ということにこだわらず、広く入会を歓迎することに規約を変更し、島田、片山（武）の入会が実現した。

四月、木曽御岳へ前田（房）、片山、木曽駒ケ岳へ片山（武）。五月、鹿島槍ガ岳、爺岳へ、冷沢小屋より三の沢から東尾根第二岩峰を登り鹿島槍頂上へ、鎌尾根を下降、翌日は爺ガ岳を往復、前田（房）、久米、片山の三人が参加。三月に片山（武）が単独で栂池から白馬岳へ登頂後引返して黒菱小屋から八方尾根、唐松岳、白岳、五竜岳を縦走し神城村へ下山している。

「嶺」の会報は昭和十年六月に第一号、十二年の八月に第二号の二冊だけ発行されている。その第二号の後記に、発起人で創立以来リーダーシップを取って来た前田房男が退会したことを記述している。会の動きにシックリと合わなかったようであった。この二冊の会報にまとめられたあとの記録は今の処全く無くなってしまっている。この年の七月、支那事変が勃発し日本は戦時態勢へと入っていった。昭和十三年の一月は猿倉の小屋の上方に冬山用に新調したポーラー型のテント他を数張り設営し、白馬岳主稜や杓子尾根から杓子岳への登頂を目ざした。戦争は激化する上に七月には神戸市は未曽有の山津波による大

水害に見舞われ前田浩君の家は完全に土砂の底に埋まってしまった。この年は山登りどころではなかった。昭和十四年一月は上高地の木村さんの小屋に泊めて頂き玄文沢から西穂高岳を登頂した。十一月、正沢谷から木曽駒ガ岳、宝剣岳へ。十五年一月の冬山合宿は大山へ集中し、三鈷峰北壁の積雪期初登攀を記録した。五月には冷沢小屋から鹿島槍ガ岳へ向い三の沢、東尾根より登頂、爺ガ岳から長ザクを下った。八月、涸沢に合宿し前穂高北尾根や北穂高滝谷側のクライミングを楽しみ、前田（浩）、馬場は槍平から滝谷を登攀した。十一月、越百川を遡行し越百山から空木岳へ縦走、伊那谷へ下った。この頃、西林、梶原や新川、川本、生田、中村、谷山、三宅康市、伊藤、吉井、木村次郎、鍋谷、新川成信などの若い人達が入会して来ていたと思う。この秋神戸山岳会を創立発足し、約七年弱続いた「嶺同人」は解散してこれに合流し幕を閉じた。若々しく活力と友情に満ちたグループであった。嶺同人のリーダーだった青木一男氏は神戸山岳会に合流した翌年十六年六月十三日不幸にして不慮の死をとげ、私共は深い悲しみにつつまれた。

昭和二十一年六月、北支那から復員し神戸へ戻って来た私の処へ新川や川本らも復員して集って来た。木村、前田、島田、馬場、廣瀬等と連絡を取りあい厳しい暮らしの中から再び山へ向っての意欲を沸きたたせた。神戸山岳会は戦争中にやむを得ず作った集団だったため自由に山へ行けるようになればバラバラに解体される運命にあった。従って再建の呼びかけに応じて集まって来た旧嶺同人の仲間が自然と中心となっての再出発であった。中村作三、生田育雄、片山武臣らは戦場の露と消え還らぬ人となったが、やがて日を追って新しい若い人達が参加して来て神戸山岳会は再び潑剌とした活気に満ち満ちた集団となり岩壁に、雪山に熱気を燃やしはじめた。

神戸山岳会創立と運営の中心となって戦中戦後を山一すじに努力を重ねて来た「嶺同人」グループの昭和九年（一九三四年）から五十六年間にわたるいきさつを披露して思い出の記と致した。

神戸山岳会の会章について

川本　勉

神戸山岳会が、創立以来五十周年を迎えることになり、年の流れの速いのに改めて驚いています。

会章を思いたった動機につきましては、会報三号（一九五〇年発行）と、もう一度他に書きましたが、すでに三十年以上も前の古いときのことで、会員の世代も変り読まれた方は数える程しかいないのではないかと思います。

私達が山へ行きだした頃には、ただ同好の者が自然と集まって山にいっていたもので、会も何も必要ではなかったのです。それがだんだんと人数が増えてくると、この自然発生的な集まりでは、やはり都合が悪くなり、登山という一つの目的を持った団体をつくったわけで、それには規約が必要であり、そのシンボルマークとなる会章も必要となってきた訳です。

従来から多くの山岳会のマークといえば、その会の目的を象徴するために、殆んどのところ、ザイル・ピッケル・ハンマー・ハーケン・カラビナ等をあしらった図案が多く使われています。それはそれで目的意識がはっきりしていて面白いと思いますが、あまりにも類型的で、新味に乏しく、新しく再興して、若い希望と情熱に燃えている神戸山岳会の会章としては、あまりにも古くさくマンネリ的なので、新しい感覚で新しい理念を表現したものにしたいという発想のもとに考えました。

それは新生〝神戸山岳会〟にふさわしい山への情熱と理想、行動を新しいセンスで表現したシンボルマークが欲しかったのです。

天と地の間にそびえる山!!その上部の半球はどこまでも青く澄みきった大空であり、下の半球は、私達の生活している緑なす大地であって、その間に、どこまでも高くそびえる大いなる峯!このより高いものを求めてやまない心こそ、アルピニストの純粋な心であり行動ではないでしょうか。

このような気持を、多少とも表現することができたと思って、この会章を考えました。どうかこれからもご愛用ください。

剱岳によせて

新川利夫

最初「剱岳との四十年」という題をもらって久しく考えていたが、私が剱岳に情熱を燃やしたのは昭和二十四・二十五年の二年間にすぎないように思われます。勿論それまでにも剱岳には登っていましたが、所謂一般的な八ツ峰、源次郎尾根の登攀ぐらいでした。私たちが二十四・二十五年の充実した合宿をした後に若い会員の人達が毎年のように剱岳に入り、種々の記録を樹立していったのであって、私のようなものが「剱岳との四十年」とか「剱岳とKAC」といったものを書く資格がないように思われ、なかなか筆が進まない状態が続いておりました。しかしながら、KACが剱岳へ通うようになった何等かの口火を切ったのかも知れないといういささか自負する気持もあり、あえて筆を取らせてもらいました。

人間は、人生のある時期に最も充実した思考と行動がとれることがありますが、登山活動もそれと同じようなことがいえるのではないかと思います。勿論その人の環境その他によって年齢的にも差がありますが、私の場合、肉体的にも精神的にも戦後剱岳に通ったあの二年間が、最も充実した登山ができたと思います。

戦前私が本格的に剱岳に登らんとしていたころ、すなわち昭和十二～十五年頃、登山界一般や先輩たちの目は穂高の奥又白に向いており、特に前穂四峰正面壁の登攀の可能性が論ぜられておりました。そんなある日、神戸好日山荘を訪れた時、小柄の人が盛んに店主の島田眞之介氏と議論をしておりました。その内容は忘れてしまいましたが最後に「俺はやっぱり穂高より剱の方が何となく深い感じがして好きや。剱の西面なんか未だ良い所が

残っているよ」といった言葉が、忘れ得ず残っているのを覚えています。その人が帰ったあとで島田氏に「あれが北条理一や」と聞かされ、あああれが剱のチンネや錫杖の岩場でルートを拓いた北条氏かと、RCC報告のなかの記録を思いだし、畏敬の念を抱いた事がありました。

あのいまわしい戦争が終わり、敗戦の当然な結果として精神的にも、また物質的にも悪化していたなかにあって、山への思慕は私にとって消えんとする情熱をかき立ててくれる源泉でありました。二十三年夏、奥又白の池から眺めた前穂東面のモルゲンロートは、戦争に打ちひしがれた心に希望の灯をともしてくれました。時あたかも、富山高校による東大谷の登攀があり、その時ふと思い出されたのがあの時言った北条氏の言葉でした。そうだ、次は剱に入ろうと皆に呼び掛け、二十四年には片山会長をチーフに黒部から二股に入り西面の偵察と登攀をやり、次いで二十五年には故前田会長をチーフに二十数名にのぼる人数で剱沢に入り、全員の気持の盛り上がりが如実に発揮され皆が会心の登攀を為し得たのでありました。

あの当時の人達も或は病に倒れ、また山から離れていき、現在では指折り数える程しか残っていないが、あのときの思い出は未だに皆の心の片隅に残っている筈です。

一度踏入れた剱岳西面の、あの凄愴そのものの岩のたたずまいに強烈な魅力を覚えたのは私だけではないと思われます。だからこそ、私達の後に続いた人達が剱岳に通いつめたのでしょう。

あの時より登山の形態や思想も随分変わったものです。しかし登山そのものは本質的には変わっていないと思います。誰もが最初新人として山の洗礼を受け感激するとともに、決断と努力によって次第に困難なルートをこなしていき思索することは、自己の人間形成にとって、また社会人として有意義な体験であると思います。そしてそこには、他のスポーツと異なり、スタンドの声援もなければ優勝の晴れやかな舞台もない。登頂を祝してくれるのは唯無言の山々であり、ひそやかな自己の喜びであります。どうか会員の皆さん、今後とも各自が充実した山行をして戴くことを願っております。

たった二人の山

今は亡き最も優れたクライマー広瀬君を偲んで！

川本　勉

長い間に積み重ねてきた山行！その一つ一つが、昨日の出来事であったかの如く、そのはっきりとした映像が、私の胸中を走馬燈のように過ぎ去っていく。どれ一つをとっても忘れがたい思い出に満ちている。

昭和二十五年の夏、剱岳合宿でのことだった。

昨夏の合宿で、三宅康市君と二人で東大谷中尾根の初登はんを目ざし、その直下まで登りながら引き返した為に、この度は是非共完登しなければと、張り切って合宿に入った。

最初は、昨夏と同様、三宅君とメンバーを組んで東大谷へと下る途中、三宅君の腕に落石が当って怪我をするという不慮の事故の為に途中で引返し、同君にとっては返す返すも残念なことであったろうが、テント要員として残留、急にメンバーを変更して故広瀬文雄君と行を共にすることとなった。

広瀬君の岩登技術の優秀なことは、関西のみならず、広く全国的にも山仲間では定評があり、ザイル仲間としては全く申し分のない人物であった。

昨年の偵察行で一応のルートは、わかっていたので、以前に比べて予定よりも早くスムーズに進み、昼前には中尾根の出合の滝の下に達することができた。

谷は殆ど滝の連続であり両岸の荒れはてた岩はだは、今にも私達を押しつぶさんばかりにそそり立って、何となく荒涼として暗く、あたかも人が入るのをこばむかのようであった。ただ谷を流れる水は清く澄んで冷めたく夏の明るく輝くような日ざしが、たった二人だけのこの世界にとっては、唯一のなぐさめであり、ともすればくじけそうになるファイトをかき立ててくれた。

出合で軽い昼食を取るうちに、昨年の三宅君との偵察試登で退却の途中、この出合まできたときに日が暮れかかりやむ無くビバークすることにしたが、谷間では一寸の雨でも増水で危険があるために、滝の左に出ている小さなやせ尾根の上に登り、はい松の太い幹に腰をおろし身体をザイルでしっかりと幹に結びつけた。そうして昼に食べ残したたった五枚のビスケットを二人でわけ合い、空腹と寒さにふるえながら、寝れぬ一夜を過したことを、懐しく思い出していた。

さあ！これからがいよいよ本番だ。滝の少し左側を巻きながら登っていった。これは大丈夫と思って手をかけると、畳一枚位もあるような大きな岩がゴトッと音を立てて動くのでヒヤッとさせられる。然し昨年に比べて、多少でも勝手がわかっている為か、意外と楽に登ることができた。

滝の上のルンゼは、細くて急ではあるが大してむつかしい処もなく、楽な気持でお互いに冗談を飛しながら上へ上へとつめていった。

午前中は、とてもよく晴れていて、振り返ってみると軍剱や大日からの美しい緑の尾根が、眼を楽しませてくれていたのに、ルンゼの中

程にかかる頃から、東大谷の下の方から突如として、広がり沸きあがってくる濃いガスに、周囲は見る見るうちに白くおおわれてしまい、すぐ眼の前のチョンラピークも中屋根も視界からは消え去って、たった二人だけが乳白色の陰うつな世界の中に取り残されてしまった。

このガスのために少しルートを左の方に間違えたようで、どうやらコマ草ルンゼとの間の尾根の上に出たらしく、チョンラピークに向って厳しくそそり立っていて直登はとても不可能である。視界は極めて悪く三〇米のザイルに結ばれているお互の姿がしばしば見えなくなる位なので、思うようルートを深すこともできないが、どうやら右へ右へとトラバースすれば中尾根に達するように思えた。

然しそこはルンゼへと一直線に落ち込んだ急斜面で、浮石の上にじめじめと湿った泥土と、高山植物が乗っていて、しっかりしたホールドもなく不安定なルートであるが、とに角前進するより仕方がないのだ。

「オーイ、広瀬、俺が先に行く、ビレーできるか?」

「そうか、一寸まった。ビレーのためにハーケンを打つから」

コン・コンコン・カーンカーン・カーン

「さあー、大丈夫だ。行ってくれ。然し気をつけろよ。足場が悪いから」

「よーし、いくぞ」

一歩一歩と踏みだす。どの石に足をのせても、手でふれてもぐらぐらと動く。手を土の中に突込み草の根をホールドとしてバランスをとり、そっと足をおろすとじわじわと靴が湿った土の中にめり込んでいく。ハーケンを打つようなところはない。ただ腰の七つ道具が重くてじゃまになるばかりだ。あたりは乳白色の濃いガスに囲まれているのがかえって幸いする。もしもカラッと晴れていたら、足下に落ち込んでいる東大谷が一望の中に入って、恐らく足がすくんで前に進めなかったことだろう。

漸く二分の一位きただろうか。小さなはい松が一本、岩の割れ目にはえていた。その根をしっかりとにぎると、それもぐらぐらしているが、草の根よりもはるかに心強い。それを持って一息入れる。

「オーイ、ザイルはあと何メートル位残っとるか」

「そーやな、あと一〇米位残っとるわ、あとどの位と思うか」

「もうあと一ピッチ位と思うが、それやったらたらんなあ。途中の足場のええところまできてくれるか」

「よしゃ、途中までいくぞ」

そのとき、以前に読んだ山の本に、あるパーティが大変悪い岩場にかかって、トップのリーダーがザイルを自分のバンドにはさんで登っていったというのである。

そうだ、これではどちらもビレーは出来ない状態だ。もし俺がスリップしたら二人とも助からないだろう。何も彼まで道ずれにする必要はないのだ。俺だけで充分だ。

下から「おーい川本、ちょっと足場のええところまできたから行ってくれ。慎重に頼むぞ」

「よーし、わかった。いくぞ!」

私はそろそろとザイルをほどいてバンドに軽くくくりつけた。

傾斜はますますきつくなる。ホールドはあい変らず悪く不安定で、少しでもバランスをくずすことは死を意味することであり、絶対に失

敗は許されないのだ。ザイルにもハーケンにも頼ることはできない。ただ自分一人の力に活路を見出すことができるのだ。

慎重に！細心の注意をはらって、踏み出す一歩一歩に精神を集中してトラバースを続けるのだった。

下から吹き上げてきた風に、一瞬ガスがサーッとぬぐい去られてみると、すぐ眼の前に中尾根の大きな岩とはい松が現われ、その上にはチョンラピークが見えたのだ。

私は最後の力を集中して漸く大きなはい松にたどりつき、しっかりと抱きしめるようにして乗りかかり、

「おーい、中尾根にたどりついたぞ！しっかりビレーするからこいよー！」

「よーし、いくぞ！ビレーを頼むぞ」

中尾根に着いた二人は、つい先程までの悪場のトラバースを他人ごとのように談笑しながら、ピークへと一歩一歩登っていった。

恐らく今迄、誰一人として足を踏みいれたことのないこの頂上に、二人はガスと汗で全身ジットリと濡れながらも、しっかりと立つことができたのだった。

「ああ！とうとう登ったなあ！」

この短い言葉の中に二人の大きな感動をこめて！。

思い出の山

新川利夫

喘ぎながら登りつめた三ノ窓の池ノ谷側は一面ガスが巻いていた。テントはおろか紙屑も缶詰の空缶も見当らないコルは、唯荒々しい岩屑の埋積があるばかり。その中に岩小舎はひっそりと主を待ちわびているかのように口を開けていた。静寂そのものの中で音といえば三ノ窓を吹き抜ける風の音と吾々の話声だけで、それが思いの外大きくチンネの壁に反響するので何かしら山に遠慮するような気持になって、段々と無口になってしまう。

昭和二十四年八月、剱沢二股に合宿したときの幾日かを三ノ窓の岩小舎で送ったが、その間他のパーティにも会わず、チンネや剱尾根を登って帰ってくると何時も岩小舎は出掛けたときの姿そのままで吾々を待っていてくれた。岩小舎の天井のテラスで後立山の夕映えや池ノ谷の高い側壁に区切られた空の彼方に沈む雄大な落日を眺めながら、乏しい夕餉の宴を開いたり、或いはそのまま降るような星空を眺めながら山を、アルピニズムを、また人生を夜の更けるのを忘れて議論したものである。また或時は、小窓寄りの陽だまりの草原でチンネを正面に眺めながら紅茶を沸かし、八ツ峰を縦走してくる仲間とコールを交わしながらのびていたこともあったり、思う存分に岩小舎生活を満喫していたものである。

唯その楽しい思い出もＢＣの撤収を約した日に天気が崩れ、どうせ停滞だろうと決めてかかり、二股のＢＣで炊き上がった夕食にありつき後は寝るだけと横着な気を起こしたのが運のつき。午後の四時頃から雨の三ノ窓雪渓を走って下ったが既にＢＣの影はなく、さればと長い剱沢を登り剱小屋にやっと辿り着けば、乗越小屋に集合という空しい言づてに、半ばやけくそ気味でフラフラになって九時すぎにやっと乗越小屋に追いついたという、苦い思い出がおまけについている。

私の数多い山行の一つ一つにはそれぞれの楽しさや苦しい思い出が残ってはいるが、あの戦後の不自由な装備と食料事情の中で真剣に山に取組んだあのころ、及び三ノ窓岩小舎の生活を思い出すと、やはり若いころの心の躍動を覚えてきて懐かしい。

但馬をめぐる山々

――その踏査と出版の軌跡――

丸屋信雄

神戸山岳会に籍をおいて三十年余。しかし、最近にいたる後段のこ二十年近くは、すっかり会務はおろか会の山行からもご無沙汰していました。当会の創立五十周年を迎え、この会報の編集にたずさわるようになって、その中期に同期の会員と精力的に取り組んだ但馬周辺山岳の踏査当時を彷彿として思い出し、当時の苦労を懐かしむ時を過ごすことがあります。

当時は日帰りの例会山行でも、例会当番にはレポートの提出が義務づけられ、概念図とともにコースの概略説明と時間記録を必ず報告することになっていました。

概念図を書くことはとりもなおさず地図の読解力がもとめられ、コース説明は観察力と文章力が不可欠の必修要件でしたから、折りにふれてこういった勉強会もよくやったものでした。当時の月例集会で、

ある有名なプロ野球選手が、「子供のファンには聞かせたくないことだが」とことわって、「私（話し手）を含めて野球の選手は本を読まない」

と言った話しが話題になったことがありました。野球を職業とする者は眼を痛めてはならないからだ、というのがその理由であったと記憶しています。大方の意見は、プロ野球の選手でなくともスポーツマンの多くは、本なぞ読まぬ人が多いのではないか、という結論に落ち着きました。もっとも理屈屋のＫＡＣの面々のことでしたから、ただし山に行く奴は別だが、という注釈がついたのはいうまでもありません。未知の山岳や岩壁に挑むためには、文献の収集と文章の読解力が求められますから、ＫＡＣのみでなく、登攀者として、登山には読書はかかせない当然のこととして、ひとときの退屈しのぎの話題におわりましたが、今から考えても感心するぐらい、本をよく読んでいた連中が多かったように思います。

そういった雰囲気が例会報告も真面目に、しかも詳細に記録として残す習慣として定着していったのでしょう。話が前後しますが、この頃読図力と文章力を培ったことが、その後会の財政に大きく寄与した「ガイドブック但馬をめぐる山々」の出版や、大阪創元社の二、三のガイドブックの、コースガイドにたずさわるきっかけにもなった、といえるのではないでしょうか。

私は入会するまで、もっぱらガイドブックを参考に六甲、北摂の低山の一人歩きを楽しんでいましたが、六甲の大月地獄谷を登った翌日、地獄谷で転落事故があったことから、ザイルワークの必要性を教えられて入会。前段のようなそうそうたる先輩にしごかれながら、一年ばかり経過した昭和三十四年の暮れに、春になって雪が落ち着いたら、兵庫・鳥取両県境の尾根どおしに、氷の山から扇の山までを縦走しようではないか、という計画が持ちだされました。

私のスキーの腕前は滑降を愉しむというよりも、もっぱら積雪期登山のアプローチをこなすことが主たる目的でありましたから、それまでにも但馬周辺の山々へは練習をかねてよく登っていたものの、大抵は夜行日帰りか、夜行・夜行帰りの軽装備登行。重装備のスキー山行は始めてのことなので二の足をふみながらも、いいぞいいぞとおだてられ、ついその気にさせられて、ついていく羽目になりました。

いざ、計画実行の段階になって、このルートにかかわる文献が極めて少ないことに大いに戸惑いを感じました。単なる荷を担いでの（ボッカ訓練と称していた）体力増強のトレーニングであっても、例会報告としてレポートの提出が強制されていたので、但馬周辺山地の記録はそこそこ集積されていましたが、それらをまとめても、全行程をカバーできるものはなく、周辺地域の文献も皆無に近い状況でした。このようなことが、それからの但馬への精力的な踏査のきっかけになった、といっても過言ではありません。

それまでは、氷の山・鉢伏、神鍋、蘇武・妙見周辺がスキー登山のゲレンデとして集中的に登られていましたが、一九六〇年（昭和三五年）の正月合宿は、青下を基地に、扇の山北東にひろがる上の山高原一帯に総勢四五人が参加、周辺の踏査にも精を出し、県境尾根縦走の基礎をかためました。そして三月、いよいよ氷の山・扇の山縦走。縦走の前段は快晴に恵まれ快調な行程でしたが後半には天候がくずれ、因但国境山岳の積雪期の厳しさを思い知らされた山行として、当時のメンバーの思い出話のタネとなっています。

こうした経緯をたどって二年、昭和三七年秋にタイプ印刷ながら、B五判で写真版四頁、本文九八頁の『但馬をめぐる山々―主として積雪季登山のために―』の発行にこぎつけることができました。

手前味噌になりますがいまひもどいても、なかなかみごたえのある労作で、前文には「氷の山を中心とした県境及び西北山地・特に積雪季について」但馬の山々の概念の紹介。開発小史、登山施設、但馬の冬山の危険性、雪崩について等々。小文ながら当を得た解説と、概念図作成記号の「略図凡例」まで付してあり、表紙は、故前田浩氏が古文書屋でたまたま見つけたといわれる「天明七丁未年正月　江戸日本橋南江三町目前川六左衛門　刊」とある『但馬大絵図』があしらわれています。

昭和三五年春から三年近い踏査の概要を、同誌に掲載されているコースに対応して列記してみると以下のようになります。

（同一人が再度踏査されたときは、二度目以降は姓のみとしました）

1、積雪期

氷の山

氷の山へのアプローチ

東　尾　根

アプローチとして常に利用したコース。

流れ尾

三六年二月＝岡崎群治、萩原邦一、岸本光弘、宮永泰男、小嶋勝俊。

分廻しコース

三五年二月＝前田　浩、岡崎。

大段平から安井へ

三五年一月＝萩原、野上芳宏、岸本、小嶋、宮永。

大段平から横行へ

三七年三月＝岡崎、吉岡直美、丸屋信雄。

殿下コース

三七年三月＝前田、新川利夫、大樫正之、岡崎、西本賀昭。

県境尾根コース（戸倉から氷の山往復）

三三年三月＝宮松　暁。

わさび谷コース

三七年三月＝大樫、岡崎。

小舟コース（二の丸から小舟へ）

三七年三月＝萩原、林　文展、名村彰男。

二の丸から長砂スキー場

三六年三月＝大樫。

落折から氷の山コース

三七年三月＝萩原、丸屋。

小豆ころがしから氷の山越

三五年三月＝前田、ほか。

氷の山頂上からの下降路について

鉢伏山周辺

その周辺コース

三七年二月＝大樫、岡崎。

鉢伏山から瀞川山へ

三七年三月＝大樫。

氷の山から扇ノ山への縦走

三五年三月＝大樫、三宅康市、岡崎、萩原、三宅信道。野上、小嶋、丸屋。

扇ノ山

菅原からのコース

三六年三月＝丸屋、大前昭彦、ほか。

小代谷からのコース

三五年三月＝前田。

広留野から諸鹿へ

三七年二月＝萩原、梅原秀平。

上地へのコース

三六年三月＝丸屋、大前。

大石からのコース

三七年二月＝萩原、梅原(秀)。

青下から扇ノ山

三六年三月＝前田、三宅(康)。

鳥越へのコース

三六年三月＝(高体連)沼田敏彦。

神鍋山周辺

蘇　武　岳

三七年三月＝前田、大樫、萩原、金田　晏。

妙見山から蘇武岳縦走コース

三七年二月＝大樫、岡崎。

三　川　山

三七年三月＝大樫、野上、榊　雅子。

因美国境の山

東山・沖の山周辺

三六年三月＝新川。

三七年三月＝大樫、岡崎。

那　岐　山

三七年三月＝岡崎、岸本。

播磨西北の山

三　室　山

三七年三月＝三木善隆、三宅(信)。

道仙寺山から大海山

2、無雪期

播磨高原

段　ケ　峰

三七年二月＝片山英一、新川、岸本、金田、三宅(信)。

夜鷹山から峯山高原

三七年六月＝新川。

雪　彦　山

三六年一一月＝野崎　良、三宅(康)、丸屋。

雪彦山の岩場について

雪彦山から鹿ケ壷コース

峯山・雪彦山縦走

以上二コース・三六年一一月＝大樫、谷口忠男、榊、吉岡。

日名倉山から道仙寺山

三六年一一月＝岡崎、小嶋、朝倉美子。

粟ケ山（粟ケ峰）

三六年一一月＝野上(芳)、野崎、金田、堀野和子。

笠　形　山

三六年一一月＝三木、堀野。

千ケ峰から白口谷

三七年三月＝新川。

藤　無　山

三六年一一月＝前田、丸屋。

氷　の　山

三七年八月＝前田、野上(芳)。

扇　ノ　山

三五年一一月＝大樫、三宅(康)。

あとがきには、踏査の時期とメンバーに関して「この表は、本文の資料調査として行った最近の山行のみを掲げた。このほか多くの会員の記録から編集した」旨が付されているのは当然というべき注記で、その間の事情は、萩原邦一君の「踏査について」と題した後記にもあ

らわれています。文末の二行にこめられた思いが、当時の我々の心情をよくあらわしているので、いささか長文にわたりますが転載しておきます。

会員の一人一人が、コツコツと文字通り足で書いたというべき記録。それも各人の手元にあるうちはささやかだった記録も、積もり積もって、このようにまとまって冊子になったものを手にとって見ると、一昔前に聞き古された言葉ではあるが、一致協力の偉大さ、といったものをしみじみ味わった次第で、踏査に汗を流し、執筆に頭をしぼった人達は、感慨もひとしおであろうと思う。

この冊子に収められている記録のほとんどは、会員が割り当てられたコースを、自己の山行として積極的に踏査して書いたもので、その情熱と責任感には、唯々頭が下がる思いである。督促係をつとめた者が、逆に立ち遅れて面喰らうほどであった。

実際の踏査については、絶対に正確を要するので、歩いてもズボラは出来ず、見落としたりすればやり直さなければならないので、自ずと真面目な、そしてよく観察する真剣な山行となった。その上、帰ると執筆という大仕事が待っていて、行って来た山の姿を思い出しつつ書いたこれらの記録は、「書くこともまた登攀なり」と言うが、実際の登攀の方がまだしもたやすいと思ったほどで、これは執筆した全ての人達の感想であろうと思う。

このように、もろもろの思い出をこめたこの冊子は、我々の青春の一時期を記念する貴重な「証（あかし）」であることは確かなようである。

略　図　凡　例

名称		記号
尾根		太さ1～1.5耗
川		5万、地図に表示されているもの及びルート説明上、必要な沢／細線
頂上及コブ	三角点のある頂上	▲
	〃　ない　〃	△
	独標及びコブ	○
道路	自動車道路	巾1～1.5耗
	林道	〃
	山径	
	困難な山径	
池及び湖沼		
村落		
峠・コル		

名称		記号
植生	籔	ルート説明上、重要な目標となるもののみを表示すること
	針葉樹林	
	広葉樹林	
	草地	
崖		
岩場		
滝		
雪崩の出るところ		
雪庇		
顕著な雪原		
スキーツアールート		山径と同じ
学校、寺、社、墓地、橋独立樹等		5万、地図に準ずる

と述べてくれています。

そしてまた、彼は概念図をまとめる一助にと前頁下段のような凡例記号を考案し、かつ二〇数葉におよぶ図面の作成、監修にあたるなど、編集にも青春の血を沸き立たせて、取り組んでくれたのでした。

ひとつの大仕事を成しとげた後は御多分にもれず、いささかのスランプもあって、相変わらず但馬へのツアーは行うものの、さしたる進展もなく、それでもコツコツと記録の集積は続けられていました。

私はといえば、当時神戸市市長室におられた大西雄一氏が、六甲山のハイキングガイドを執筆されており、市役所山岳部が主にコースの調査にあたられていたものの、たまたま六甲山に勤めをもっていた関係で、前田さんのすすめもあって山頂周辺の案内などを手掛けたりしていました。そうこうするうち、全日本登山体育大会が但馬山地において行われることになり、前田さんが兵庫県山岳連盟の理事長をしておられた関係もあって、再び但馬とのかかわりをもつことになりました。

しかし昭和三九年夏、剱岳合宿において遭難事故が発生。年次会報は昭和三四年第七号を発行して以来とだえていましたが、遭難の顚末と反省の証として、月報という形の報告集でお茶を濁していた私もかりだされ、会員諸兄とともに会報の編集と、但馬山地の大会準備をかけもちで没頭することになりました。

全日本登山体育大会は盛況裡に昭和四〇年三月におわり、会報第八号も夏に発行することができました。この全日本登山体育大会の参加者のうちから、かって発行した「但馬をめぐる山々」が評価されていたこと。また、関係機関にお贈りしたものが扇の山小ヅッコの小屋に置かれていて、小屋に備えられていたノートに意見がのべられていたことなどから、再び「但馬をめぐる山々」の発刊が検討されるようになりました。

昭和四〇年後半に、創元社（大阪）が「関西ハイキングガイド」の刊行を企画し、六甲山・北摂のコースガイドに参画してほしいとかの要請があって、すすめられるまま会として数コースを担当することになりました。新たに取りくむ但馬の山々の、出版形態を模索していたときでもあり、この作業はその後の編集について、大変よい勉強になったといえます。

昭和四一年に、戦後復活した神戸山岳会二〇周年記念行事が企画され、但馬の本改訂版の発行（これは私にまかされました）。記念会報の発行と祝賀会を四二年一一月に、そして翌四三年二月に記念山行としてスキー登山を行う計画が発表されました。

記念行事そのものは、氷の山スキーが実施された以外は沙汰やみになってしまったようでしたが、四一年一二月から、小嶋勝俊君と共に踏査計画に着手、会員諸兄の協力をえながら踏査計画をねりました。

またこの頃、創元社から新たに「関西の山々」の企画が持ち込まれ、土居健治君と六甲山二コース、播磨高原山地四コースを計画、但馬の踏査と並行してすすめていきました。

但馬の山々踏査は積雪期、無雪期の別に、コース別に担当者を指定した表を作成、踏査要領も統一して徹底を期しました。その頃作成した「但馬周辺山岳踏査計画案」では、注意事項に、

一、本表は一応の基準を示したもので、踏査に当っては相互に連絡をとって行って下さい。

二、踏査メンバーの指定のないものでも、出来る限り単独行はさけ、資料の収集に努めて下さい。

とうたっています。「踏査メンバーの指定のない」とは、今考えると複数の氏名を記したものと、担当者のみしか記載していないものがあったからだったのでしょうか。

しかもこの表には、ご丁寧にも「踏査の要領」として、創元社ガイドで培ったノウハウの一部が掲げられているのも面白い。

一、交通機関　直近の国鉄駅から登山の基地となる村落、又は山麓までの交通機関及びその名称ならびに所要時間と料金。

例・国鉄八鹿駅から丹戸まで全但バス一時間一八〇円（スキー五〇円）

二、宿泊施設　登山の基地となる村落、又は山麓の施設と料金

例・雪彦山ホステル（一五〇名）五五〇円。他にバンガロー有り。

三、コース　山麓からのコース概要と要点（六甲ハイキング及び関西の山々踏査要領に準じて行う）。特に分岐点での目標、方位、展望等を記録して欲しいものです。

四、地　図　五万分の一地形図を基に概念図を作成し、取付点、分岐点、下降地点を拡大記入して下さい。（六甲山ハイキング参照）

五、その他　対象とした山岳とコースに対して、上表に入っていないものは※印を付してあります。できればこれらも行いたいと思いますが、従前の記録をもとに、資料の整理を行えばコースの紹介も可能と思われますので、その付近へ出向かれるときは、上記に準じて資料の収集に心がけて下さい。

等々なみなみならぬ熱意で取組んだ様子が伺えます。

こうして軌道にのった踏査計画は、四三年秋までに発刊することを目標に、月例会行事には必ず組み入れ、また、個人山行としても積極的に取り組まれて、まずは順調に実行にうつされて行きました。

さて、さきに紹介した「但馬をめぐる山々―主として積雪期登山のために―」は『踏査の記録』集とし発行しましたが、今回は単なる改訂版ではなく、「ガイドブック」として発行しようという、これまでの経緯をふまえたうえで取り組んだことから、前記のように、取付き点、分岐点、下降路等については、その部分を拡大、明示しようといったガイドブック的な概念図の掲載を計画したので、取りまとめの段階ではしばしば〃NG〃が出され、再踏査の憂き目にあうことも少なくありませんでした。

幸い、前回の踏査の記録としての「但馬をめぐる山々」は関係の向きから好評をいただき、おこがましくも頒価「二五〇円」を付して、寄贈以外に若干部数が頒布できたので、そこそこの原価償却ができたこと。あるいは「関西ハイキングガイド」の再版、「関西の山々」の発刊等で、しかるべき印税が見込まれたことなどから、これまでは弁当代、足賃も本人支弁であったものを、再踏査や無雪期などの資料収集山行には若干の実費保証が可能となりました。

それだけに、今度はその編集作業に踏査疲れもいとわず、連夜の如く前田さんのお宅を編集室がわりに、ルートの行程をキルビメーター

で距離を測り、踏査の際の時間記録を集成して所要時間を求めたり、拡大案内部分の作図に専念するなど、文字どうり団子になって、ようやくガイドブックらしい原案がまとまりました。

最終段階にはいった昭和四三年七月の神戸山岳会月報第四九号に、例、集会スケジュールとして「七／二七・但馬編集会『但馬をめぐる山々』編集・徹夜・前田氏宅一九・〇〇」の記事が見られるように、会員諸君もさりながら、前田さん御一家の全面的なご支援もあって、ようやく印刷にかかる見通しがたちました。

ガイドブックと銘うったことから、本の体裁もB六判のポケットサイズに改めました。内容は、コースごとに写真（モノクロ）と前記のような概念図、コースの出発点から各ポイント間の実粁と所要時間。本文には、対象山地の概念紹介とコースの案内文。見所や着目点等々の記述をいれるなど、いっぱしの案内書の形態がととのいました。

収録した対象山岳・山地とコース、同書の内容は以下のようにまとめられました。

ガイドブック

但馬をめぐる山々

神戸山岳会　編

まえがき

例　言

但馬の山々　氷ノ山を中心とした県境及び西北山地

・特に積雪期について

開発小史／但馬の冬山の危険性／

積雪量と山歩きの時期について

氷ノ山

一、東尾根コース……（積雪期）

二、坂ノ谷コース……（無雪期）

三、県境尾根コース……（積雪期）

四、大段平コース……（〃）

五、ワサビ谷コース……（〃）

六、西尾根コース……（〃）

七、分廻しコース……（〃）

八、小豆ころがし……（無雪期）

九、流レ尾コース……（積雪期）

一〇、八木川源流遡行……（無雪期）

鉢伏山

一一、ハチ高原……（積雪期）

一二、別宮コース……（〃）

一三、大笹コース……（〃）

一四、瀞川山へのツアーコース……（〃）

一五、秋岡から新屋、小代越えコース……（〃）

扇ノ山

一六、上ノ山高原……（積雪期）

一七、霧ガ滝から扇ノ山へ……（無雪期）

一八、菅原からのコース……（積雪期）

一九、秋岡から仏ノ尾……（〃）

二〇、上地コース……（〃）

二一、大石コース……（〃）
二二、鳥越コース……（〃）
二三、諸鹿から広留野コース……（〃）
二四、雨滝コース……（無雪期）

神鍋山と蘇武岳周辺

二五、神鍋山周辺……（積雪期）
二六、万場コース……（〃）
二七、山田コース……（〃）
二八、村岡コース……（〃）
二九、三川山……（〃）
三〇、大岡山……（〃）
三一、妙見山から蘇武岳縦走……（〃）
三二、阿瀬渓谷から蘇武岳……（無雪期）

播磨北部の山々

三三、雪彦山……（無雪期）
三四、雪彦山から鹿ガ壷へ……（〃）
三五、雪彦山から峯山高原へ……（〃）
三六、雪彦の岩場……（〃）
三七、段ガ峰から笠形山……（〃）
三八、千町ガ峯……（〃）
三九、黒尾山……（〃）
四〇、一山……（〃）
四一、笠形山……（〃）
四二、千ガ峰……（〃）
四三、篠ガ峰……（〃）
四四、三国山と市川源流……（〃）
四五、青倉山……（〃）
四六、粟鹿山……（〃）
四七、生野渓谷から岩屋観音……（〃）

鳥取県境周辺の山々

四八、那岐山から滝山へ……（積雪期）
四九、東山・沖ノ山……（積雪期・無雪期）
五〇、吉川から江浪峠・西河内……（無雪期）
五一、日名倉山・後山（道仙寺山）・大海山……（〃）
五二、日名倉山から船越山……（〃）
五三、カンカケ・赤西・音水渓谷……（〃）

多紀連山

五四、多紀アルプス……（無雪期）
五五、篠見四十八滝……（〃）
五六、東多紀アルプス……（〃）
五七、西多紀アルプス……（〃）
五八、西多紀の岩場……（〃）

出石山地

五九、床尾連山……（無雪期）
六〇、床尾三山縦走……（〃）

積雪期の縦走

六一、氷ノ山から扇の山縦走……（積雪期）
六二、氷ノ山から三室山への縦走……（〃）

この「ガイドブック・但馬をめぐる山々」は、さきに発行したタイ

プ印書の「踏査報告」書から七年の後発行されましたが、前田浩さんが「あとがき」で「開発がどんどん進んで、はじめ頃に踏査した山々の植生がすっかり変わった場所などが随分できている」と述べておられるように、出版ぎりぎりまで可能な限り実態に即したガイドにと、コースの変化に対応しようと苦労して情報を集め、文章をねりなおしつつ作りあげました。

やはり、すでに物故された大樫正之さんは、俺は作文と図画はオール不可（昔の通信簿・学校の成績表は、秀、優、良、可、不可で評価されていました）やから手伝わんぞ、と、のたまいながらも、編集作業には必ず顔を出され、前に記した徹夜の作業などにも欠かさず出席されました。そして、的確なアドバイスと疑問に答えていただいた反面、対象コースの変化も熟知されていて、原稿の書き直しや再踏査の指示も、当時は冷酷とも思える厳しさで臨まれました。こういった先輩の真摯な取り組む姿勢に感化された（当時の）若手会員は、そんなにいうならやったろやないか、といささかの反発も手伝ってもう一度と、自分の原稿の信憑性を確かめるために、再度、仲間を集い現地に赴くなどした手間ひまかけた作業は、今も懐かしく思い出されます。

表紙を彩る奈良尾から氷の山を望むカラー版。扉を飾る音水渓谷の美しい紅葉のカラー写真、中扉やコースごとの写真版は光陽社の片山英一氏に、本の印刷・製本は、川本勉氏が主宰しておられた甲南出版社にお願いしました。文字通りの会員だけの手づくりの気楽さも手伝って、少々の無理は承知で校正のダメ押しを続け、直接担当された小川集大さんにはしばしば怒鳴られたりもしましたが、そこは内輪のこと、最後までご厄介をかけ続けながら、こうした熱意と情熱がようやく実って、昭和四四年末に発行にこぎつけました。

このガイドブックは、定価四八〇円とまずまずの価格をつけて、昭和四五年一月末に発売されました。しかし、販路を持たない自費出版なので、これも会員が伝を求めて書店にお願いし、阪神間のスポーツ用具店も販売斡旋に力添えしていただきました。寄贈した新聞社、出版社の方々のご好意というか評価していただいた故かは定かではありませんが、書評や紹介記事を掲載していただいたことも幸いして、初版二千部はそこそこ時間がかかりはしましたが完売できて、再版の話しも出ていた模様でした。その上、兵庫県教育委員会でも注目され、教育長から「すいせんの言葉」をいただくなど、前後十年ちかい努力が実った喜びを分かち合う祝賀会を登山研修所で開くことができました。

ながながと記してきましたが「但馬をめぐる山々」の踏査と発刊の経緯は、とりもなおさず冒頭に記したように、神戸山岳会と深くかかわりあった私の十年余の、いいかえれば神戸山岳会を通じて踏み込んだ「但馬をめぐる山々」とのかかわりそのものであったのかもしれません。副題に「その踏査と出版の軌跡」としながらも、萩原邦一氏がいみじくも語った「青春の一時期を記念する」軌跡とは、私の青春の軌跡でもありました。

そして共に情熱を燃やした今は亡き前田浩さん、大樫正之さん、三宅信道さん、玉井保さん、宮永泰男さん、堀野和子さんの御冥福をお祈りするとともに、労苦を分かち合った会員諸兄、踏査を通じて触れ合うことのできた多くの方々の、ますますのご活躍を願って、結びにかえさせていただきます。

海外登山の記録と思い出

玉山東峰と主峰(3997m) 観高坪より望む　　岡田政一 撮影

雪山(3884m) 東峰より見る　　岡田政一 撮影

岡田政一　撮影　　大覇尖山(3505m)

岡田政一　撮影　　北大武山(3090m)

南湖大山(3740m) 雪山東峰より　　岡田政一 撮影

中央尖山(3703m) 南湖南峰より　　岡田政一 撮影